

## 4 歳児における模倣時の実態について —肯定的ならびに否定的な側面に着目して—

金沢大学 人間社会学域 学校教育学類 教育基礎専修

桑原 千晴

### 【問題と目的】

「模倣」は「学習」の原点になる行為である。そして幼児の成長にとって、模倣は必要不可欠な営みのひとつであると考えられる。幼児を対象とした先行研究では、模倣された子どもにもたらされる模倣の良い影響について検討されている（鈴木, 2012）。しかし、模倣が相互行為を歪ませ好ましくない結果を生む可能性については検討されていない。そこで本研究では、両義的な側面から模倣を検討し、幼児期の模倣の実態を明らかにすることを目的とした。事例を肯定的な模倣と否定的な模倣とに分類する際には、模倣発生時の感情に着目して分類を行う。感情に基づいて分析することに関して、大対・松見（2007）では、3 歳児・4 歳児において感情表出の統制は見られなかったことから、表出している感情がそのまま内面の感情とも一致していると示唆されている。したがって、模倣発生時に幼児から読み取れる感情に基づいて分析することで、模倣の実態を推察することが可能となると考えられ、感情に着目した分類を行った。

### 【研究方法】

金沢大学附属幼稚園の4 歳児クラス 52 名（平均月齢 61.25 ヶ月）を対象として、2015 年 10 月下旬から 11 月下旬の計 12 日で、したい遊びの時間に観察をした。幼児間で起きた模倣のみを対象とし、事例を分類する際には、模倣発生時の感情に着目し分類を行った。

### 【結果と考察】

事例は全部で 36 例収集された。それを、感情の種類（ポジティブ感情、ネガティブ感情、ニュートラル）と感情が生起した人（模倣者、両者、被模倣者）で分類した。

Table 1 模倣の事例分類

		生起した感情		
		ポジティブ感情	ネガティブ感情	ニュートラル
感情 生 起 者	模倣者	3	0	0
	両者	20	0	5
	被模倣者	7	1	0

以下では、カテゴリごとにより詳細に事例の分析を行った。事例内の名称は全て仮名である。

(ポジティブ感情：模倣者)

これらの事例に共通して見られる特徴として、まず、模倣された側が、模倣されたことに気づいていないか、気にしていない場合であることが挙げられる。模倣した側は親近感をもって他者と関わろうとしている結果、模倣という行為につながっているということも事例から読み取れた。

#### 事例 1-1 レースを結んだら長くなるね

メグミが、お姫様なりきりグッズの中から、頭につけたりスカートに巻いたりして使っているレースをとり、3枚結んで繋げ、長くする。リカはその様子を見て、うらやましくなったのか、同じようにレースを繋げ、メグミの方をみて笑いかける。しかし、メグミは気づいていないのか、気にしていない様子であった。

(ポジティブ感情：両者)

模倣者、被模倣者の両者にポジティブ感情が見られた事例は 20 例であった。さらに特徴ごとに分類すると、「行為が始まる時点で 1 人の場合」「行為が始まる時点で 2 人以上の場合」「偶発的な模倣」「場の参入」の 4 種類にわけられた。この中でも特に先の 2 つを取り上げる。

「行為が始まる時点で 1 人の場合」 共通していることとしては、模倣される側が模倣されることを意図せず行為をおこなっているということが挙げられる。一方で模倣する側は、はじめ被模倣者がひとりで行っている行為自体を面白そうだと感じ、実際に自分も試してみたいような面白さを得ることができたことから、それがポジティブな感情の生起につながったように捉えられた。また、模倣したことに対し、相手の反応がポジティブであったことも、模倣者に快感情が生まれた要因となりうると考える。

#### 事例 2-1-1 斜めな畳の上でも、飛べるね

デッキにて、おままごとセットのベッドとなる箱の上に、滑り台のように斜めに立てかかっている畳がある。アヤカが1人でその畳の上で飛んでいると、おままごとセットの外からその様子を見ていたマサトが駆け寄り、アヤカと向かいあうように乗って、同じように畳の上で飛ぶ。一度止まって、顔をお互いに見合って微笑み合い、その後交互に飛ぶようになる。

「行為が始まる時点で 2 人以上の場合」 共通していることとしては、模倣される側はある程度他者の存在を意識し、模倣されることを意図している、ということが挙げられる。自分の思ったとおりの反応を得られるということがポジティブ感情につながっているということである。一方模倣する側は、上記と同様に行為自体に興味を持ち、模倣を開始している場合が多いと捉えられた。

#### 事例 2-2-1 小山から駆け下りるのは気持ちいいね

チヒロは、ハルカを含む 4 人ほどのグループで小山の上で遊んでいた。チヒロが、小山から降りるとき、「あー」と叫びながら走って降りる。その様子をみたハルカが、同じように「あー」と叫びながら走って降りる。その間チヒロは下からハルカの様子を笑顔で見ている。下りきった後、二人で顔を見合わせて「あー」と叫び、けらけらと笑う。大きな声を出し合うことに面白みを感じ、共に遊ぶことに楽しさを感じているようであった。

(ポジティブ感情：被模倣)

特徴としては、まず、模倣されることを意図しており、意図していたとおりに模倣されたということに対し、満足し、自己肯定感を高めている場合が多いことが挙げられる。その結果、他者に自分の行為を「教える」などといった直接的な行為につながるケースが多く見られた。また、模倣されたことを認識したあと、自分の今行っている行為を教えるのではなく、これからしようとする新たな行為を教える、といった事例が多く見られたことから、模倣している他者の行為をみることで、自己の行為のイメージに気づく、と考えられる。

#### 事例 3-1 箱に新聞紙をちぎって入れるよ

デッキにてユキエとアヤカの二人は、空箱と新聞紙を持ち、何かをしようとしていた。そこで、ユキエがアヤカに対し、「箱にいれるんやよ」と、新聞紙をちぎりながら言うと、ユキエの様子を見ながらアヤカは同じように入れ始める。その様子をちらっとみながらユキエは作業を続ける。そのうち、ユキエはアヤカの方をチラっと見て、「もっとちっちゃくちぎって」とアドバイスを行う。それを聞いたアヤカは小さくちぎるようになる。はじめ大きくちぎっていた新聞紙と、アドバイス後に小さくちぎり始めた新聞紙とで大きさに差が出た。その大きさの差に気づいたユキエが「おおきいのは大きい箱に入れるんやよ」と言う。アヤカはそれを聞き、ユキエに習って作業を黙々とし始める。それをみたユキエは満足そうにし、また自分の作業に戻る。ユキエはアヤカに模倣され、同じ作業をしていることに安心感があるように見られた。

(ネガティブ感情：被模倣)

特徴としては、被模倣者は模倣されることを意図しているのではなく、その行為自体に対する反応を期待して一連の行為を行っている。このように、ある遊びの文脈の中で被模倣者が模倣されること以外の行為を模倣者に求めている場合、模倣されるという行為は期待通りの行為ではなく、遊びの文脈からの逸脱をまねくため、不愉快な感情を湧かせることになり、相互行為が途切れるのではないかと考えられる。

#### 事例 4-1 鉄砲ビーム

ケンスケが、トイレットペーパーの芯とヨーグルトの容器で作った自作の鉄砲で、ヒロキの目に「ビーーーーム」と言い、ビームを送る。ヒロキはそれをおもしろがり、ケンスケにされたのと同じようにして「ビーーーーム！」と手でビームを送り返す。ケンスケはビームを送った後にヒロキが倒れることを望んでいたのだろうが、ビームを送り返されたことにより、ヒロキが倒れないのが気に入らず、不満そうな表情で「はあ？」と言い、どこかへ行ってしまった。そのあとをヒロキが追っていった。

(ニュートラル感情：両者)

これらの事例のひとつの特徴としては、お互いがお互いを意識したような行為ではなく、第三者を意識した行為であるということである。第三者に行為を示すことを意識していたため、模倣行為自体に対してお互い反応がなく、特に感情を示さなかったと考えられる。

#### 事例 5-1 「先生、すごいでしょ」

アスレチックゾーンで、観察者が隅で観察していると、サキが観察者に対し「見とって！」といい、藤棚につりさげられていたロープにぶら下がって勢いを付け、ターザンのように揺れて遊ぶ。観察者が「すごいね！」と反応をすると、それを隣で見ていたハルカは、観察者の「すごいね！」に反応し、ちらっと観察者が見ているか確認してから、サキと同じようにロープにぶら下がって揺れて遊ぶ。揺れ終わった後には、観察者をちらっと見る。観察者は「すごいね！」と反応をする。

#### 【まとめ】

観察で収集した事例を感情に基づいて分析した結果、4歳児の模倣場面では、感情のみで見た際、模倣に対してどちらか一方、または両者がポジティブな感情を生起させる事例が多く確認され、先行研究の鈴木（2012）を支持する結果となった。

一方で、模倣の否定的な側面が全く見られなかったわけではない。模倣する側のベクトルが「自分が」その行為をする方にむいている場合、他者の意図を上手く汲み取ることができず、それが模倣された側にネガティブな感情を生起させる場合があると考えられる。くわえて、本研究では見られなかったが、被模倣者が模倣者に教えるといった場面では、被模倣者の教示が過度に強制的であったり、自由を束縛するようなものであった場合には、模倣者の側にネガティブな感情が生起することも予想される。また、今回は特に意識して仲間内でのポジションや性格などを考慮した分析は行えなかったが、これらの要因も、感情の生起に影響を与えるということが示唆される。

本研究を通して、4歳児の模倣の実態についての一端を明らかにすることができた。しかし、今回は観察できる期間が限られていたために、確認された事例数もまだまだ少なく、今後は事例数をさらに増やしていく必要がある。また、今回は特に4歳児クラスに注目して観察を行ったが、年齢ごとに、模倣に付随する感情にどのような違いが見られるのか、何か年齢ごとに特徴があるのかなど、4歳児以外の年齢にも着目した観察がなされることも必要である。

#### 【引用文献】

Bates. J. E. (1975). Effects of a Child's Imitation versus Nonimitation on Adults' Verbal and Nonverbal Positivity. *Personality and Social Psychology*, 31, 840-851.

鈴木裕子 (2012). 模倣された子どもにもたらされる身体による模倣の機能と役割. *保育学研究*, 50, 51-63.

大対香奈子・松見淳子 (2007). 幼児の他者視点取得、感情表出の統制、および対人問題解決から予測される幼児の社会的スキルの評価. *社会心理学研究*, 22, 223-233.